

初日の「歴史與當代道教斗科研究・臺北正一派道教科儀展演暨學術論壇」では、午前中に道教儀禮の實踐が行われ、午後はその内容の分析と儀禮の實踐について討論が行われた。儀禮を行う道士とそれを分析・研究する研究者の雙方が参加し、道教儀禮について考察するというユニークな試みである。

午前中、朱建成道長(蘆洲顯妙壇)によって實演されたのは、「大梵斗科」とい、う斗母信仰を基軸とした招福禳災の儀禮である。この儀禮は近年、清代の科儀書『梵音斗科』が発見され、儀禮の重要な要素である音楽の樂譜も残されている。そのため、傳統的な儀禮の復元ができるので選ばれたようである。

午後の討論會では、まず謝世維氏から斗科の歴史を概括する報告があった。上述のとおり、斗科は斗母信仰をベースとしており、明代の『道藏』(續藏)にも『先天斗母奏告玄科』が収録されている。また、神霄派・清微派といった、宋元時代以降に出現した新しい儀禮を主體とする流派にも斗母信仰が見られる。さらに、斗母信仰

は佛教の摩利支天の信仰と結びつき、密教の要素が取り込まれるようになったという。

その次に、儀禮を實演した朱建成道長と、香港で活動する林德強道長(香港飛雁洞佛道社)が、儀禮を實演する道士の視點から發言を行った。内容は多岐にわたったが、朱建成道長が儀禮中の瞑想について自分の経験を語り、壇の組み方を自分でアレンジしたと發言されていたのが特に印象的であった。また、林德強道長が香港の飛雁堂で斗科を行った際の映像を交えて、今行われた斗科との違いを解説していたのも興味深かった。

その後の討論で話題になったのが、現代における道教儀禮の傳統の變容である。道士が大學や大學院で道教史を學ぶようになり、自分たちの傳統よりも古い傳統に回歸するようなことも起きているという。また、インターネットなどのメディアの影響で、ほかの地域で實施された儀禮の映像が簡単に見られるようになり、各地の傳統に影響をあたえていることなどが指摘されていた。

二日目と三日目は、「當代中國道教口述史 (1949-present)」國際學術研討會」が行われた。題目のとおり、現在の道教をオーラルヒストリーから研究しようという試みである。謝氏と林氏から全體のコンセプトについて説明が行われた。

まず謝氏が、近代以降の道教をとりまく環境を概括した。清末以來の状況として、制度化された道觀・道士による道教のほか、地方の道壇・火居道士(在家)・扶乩を主體とした民間宗教が並立していた。その後、近代化が進行する中で、それらの傳統は破壊されていった。

しかし、それらの宗教は時代の波に翻弄されながらも、その繼承者たちが現在でも活動している。それらの宗教活動に携わる個々人のオーラルヒストリーを収集し、各個人の経験を「點から線へ」結んでいくのがこのセッションのコンセプトであるという。

續いて林氏からは、オーラルヒストリーをもとに、實際の道教の活動と現場の状況はどのようなものであるかを再構成していく必要性が語られた。特に人民共和國成

立以後の中國大陸における道教史の研究は不足しており、今回のセッションはそれを補填する試みでもあるという。

また、調査の対象となる専門的な宗教職能者(道士や法師など)と信仰者(居士など)が高齡化する中、インタビューによる調査が喫緊の課題となっている。そこで、個人の經歷、その宗教活動の背景と實踐、社會における活動をメインに聞き取り調査を行ったという。

なお、それぞれの研究報告の内容については、個人情報保護という観点から、ここで詳細を述べることはできない。⁽³⁾ 研究報告で扱われた時代は清末から現代に至るまで幅広く、調査地域も北方・南方を兩方ふくむ中國大陸の各地にわたっていた。

なお、このセッションで研究報告をした研究者は以下の通りである(報告順)。巫能昌氏(復旦大學)・李志誠氏(香港中文大學)・呂燁氏(國立政治大學)・陳敬陽氏(香港蓬瀛仙館)・馬惠娟氏(香港中文大學)・徐天基氏(深圳大學)・李艷氏(大阪府立大學)・潘君亮氏(パリ第七大學)・祁剛氏(廈門大學)・孫美子氏(國立政治大學)。

なお、段鵬氏(蘭州大學)も発表豫定だったが、都合によりペーパーの提出のみとなった。

また、李豐楙氏(國立政治大學)・譚偉倫氏(香港中文大學)・松本浩一氏・Florian C. Reiter氏(ハンブルグ大學)・張超然氏(輔仁大學)が講演を行った。李氏と譚氏は豊富なフィールドワークの経験にもとづき、現在の中華圏の宗教の全體像を總括していた。また、松本氏・Reiter氏・張氏は、それぞれ普度儀禮、道教儀禮における口訣、道教儀禮の構造と歴史について講演を行い、通史的な観点から道教儀禮の問題をあつかっていた。これらの発表はこのセクションに意識的に配置されたもので、個別の地域や事例を中心とした研究報告が多い中、それらを総合的な視点から再考することの重要性を認識させてくれるものであった。

四日目と五日目は、「歴史與當代地方道教研究國際學術研討會」が行われた。このセクションは、各地方における道教の展開を検討することを主眼とするものである。⁽⁴⁾

地方における道教の展開を歴史資料から跡附けること、また、明代の『道藏』からだけでは分からない、現代までの各地方における道教の様相を考察するのを目的としたものである。

まず四日目の前半は、Reiter氏・張超然氏・筆者・謝世維氏・高振宏氏(國立政治大學)・王崗氏(フロリダ大學)が、歴史資料を主軸とした研究報告を行った。雷法の道教史における位置、道教儀式と驅邪法術の關係性、宋代の茅山宗師の繼承争い、清微法と地方の密教の傳統、神格に對する各種の封號、明代の江西における淨明道の展開といった問題があつかわれた。

また、四日目の後半と五日目は現地調査主體の研究報告がラインナップされ、譚偉倫氏・巫能昌氏・羅丹氏(香港中文大學)・祁剛氏・潘君亮氏・林振源氏・洪瑩發氏(中央研究院)・林敬智氏(國立政治大學)が発表を行った。こちらは現代の中華圏を對象に地方の傳統を考察するもので、江西・福建・河北・南陽・温州・臺灣が調査對象であった。また、デジタル技術を利用した道觀ネ

ットワークの分析という現代的な研究報告もあった。

さらに、Kenneth Dean氏(シンガポール国立大學・丸山氏が、それぞれシンガポールとマレーシアなど華僑地域における儀禮の傳統、臺南とヤオ族の科儀書についての講演を行い、さらに總括コメントを擔當した。東南アジアの華僑や少數民族への儀禮と科儀書の傳播という問題點から、宗教傳統の形成についてより廣い視野で考えることができ、参加者を裨益するものであった。

以上、「道教週」の概要を紹介した。研究報告の内容も多彩であり、筆者個人も啓發を受けることが多々あった。また、周到に組織されたプログラムによって、発表者同士の討論・交流もスムーズかつ活發に行われていた。この「道教週」を開催した國立政治大學の華人宗教研究所は、臺灣の國立大學で唯一の宗教研究所とのことであるが、その組織にふさわしい力の入ったイベントであったといえよう。

なお、紙幅の都合で個々の研究發表の内容については、

國立政治大學「道教週」参加報告記

あまりふれることができなかつた。第二・第三のセクションについては、将来的に論文集が出版される豫定だという。ご興味のある方はそちらをご覧いただきたい。

註

(1) 題目と講演日・發表日は以下の通り(松本氏・丸山氏の「講演」は、今回のイベントにおいては通常の「研究發表」に近いスタイルで行われたことを附言しておく。)松本氏「普度儀禮的成立」(十二日)、丸山氏「地方道教文獻研究之意義與新課題…以漳州、臺南道教與瑤族宗教爲例」(十五日)、筆者「被篡奪的茅山宗師之地位」(十四日)。また、以下で述べるように、丸山氏は最後のセッションの總括コメントも擔當されていた。今回、招聘していただいた謝氏と林氏にこの場をお借りしてお禮申し上げます。

(2) 文献資料と現地調査の成果を組み合わせた道教研究という方向性は、筆者が前號で紹介した『比較視野中的道教儀式』國際學術研討會とも共通するものである。拙稿『比較視野中的道教儀式』國際學術研討會参加報告記』を参照(『東方宗教』第一二八號、二〇一六年)。

(3) これは國立政治大學の研究倫理規定によるものである。會議當日も、報告者以外の参加者にはペーパーを集めた

冊子は配布されなかった。

(4) なお、國立政治大學では二〇一三年にも地方の道教と宗教をテーマにした「經典道教與地方宗教國際學術研討會」が行われている。今回の検討會はさらに内容を深化させる目的で行われたものである。前回の會議の成果は、謝世維主編『經典道教與地方宗教』（政大出版社、二〇一四年）として出版されている。

日本道教學會第六十八回大會豫告

一、日 時 二〇一七年(平成二十九年)十一月十一日(土)
 一、會 場 國學院大學澁谷キャンパス
 一、行 事 研究發表會・總會・懇親會
 合同役員會は大會前日の十日(金)に行う豫定
 です。

一、連絡先 〒150-8440 東京都澁谷區東4-10-28
 國學院大學文學部 淺野春二研究室
 TEL 〇三―五四六六―四四六一
 e-mail ha@kokugakuin.ac.jp

研究發表者公募

左記の要領で、第六十八回大會における研究發表の希望者を公募します。ふるってご応募ください、なお、發表者の決定などにつきましては、本學會理事會に一任させていただきます、七月下旬までにその旨をご通知します。

- 一、發表時間は二十分程度のものであること。
- 二、發表題目及び日本語千二百字以内の發表要旨を添附すること。
- 三、二〇一七年(平成二十九)六月末までに學會事務局宛に文書及びメールで応募すること。